

野長

ひとりごと

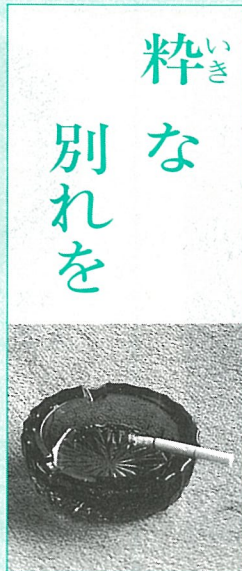
54

齊藤 讓

歌の文句ではないが、タバコや酒は一度からだ覚えてしまふと、悪女の深情けのよみに腐れ縁となつて、後になつてはなかなか断ち難い。

実はいま私は、タバコを断とうと悪戦苦闘をしている最中なのである。今まで何度となくこのような試みをくり返してきたが、残念ながら一度として長続きしたことがなく、いずれも三日坊主で終つていく。だから今回も周囲の人々の反応は「またいいいたげなほど冷たい。私もその辺りは心得ているので、敢て禁煙しているなどと野暮なこととは言わないで、ただ今休煙中だと弁解している。しかし、今回はいつもと違って既に休煙も三週間が過ぎ、今度こそは本物だとの手応えがある。何ともしてもこの際、長い間付き合ってきた「タバコちゃん」

への未練を断ち切り、後腐れのない粹な別れをする覚悟である。そして、ふだん意志薄弱だなどといつて、私を小馬鹿にしている諸氏の鼻を明かしてやりたいと思つている。▼そうは言つても、実のところ毎日五十本は喫うへピースモーカーであつたので、この煙断ちはことの外苦しく、切ない。いま私のからだの中では、ニコチンを渴望する悪女がのたうちまわり、頭の中は真白な霧がたちこめて、思考力は限り無くゼロに近い。この症状は、麻薬患者が麻薬の使用をやめたときに現れる苦痛の症状、禁断症状なのである。こんな不安定な精神状態が続いているため、この原稿を書くとしても全く思考が働かず、今だかつて無いほど気が焦つた。日をいくらか送つても、一向に頭の中が爽やかなる気配もないので、「エ



粋な

別れを

イノ儘よ。」とばかりに、このような戯言を書きはじめて次第である。

▼こうなれば、酒のことにも触れなければなるまい。タバコはよく「百害有つて一利無し」などと一方的に片づけられてしまふのに対して、酒は古来より「百薬の長」といわれ、また、酒をこよなく愛する私の恩師にいわせると、「酒の一滴は血の一滴」といい切る。このように、両者の評価

と同義語のように使われている。

▼尤も、酒飲みであるか否かは、他人が評価するところである。誰れが見ても立派な酒飲みでも、「自分は酒飲みだ」と認める者は少ない。そのくせ他人のことはよく見えるらしく、名実共に一等の酒飲みが相手をつかまえては、呂律の回らない声で「酒に飲まれは駄目だ」などとんだ説教をしている姿をよく見かけることがある。微笑ましくもあり、滑稽な風景でもある。

私も周囲からは、間違いなくこの部類に属すると御墨付をいただいている。たしかに曾って十年前の自分であれば、首肯せざるを得ないところであるが、今は違つていくらいつても認めてもらえないで困つている。偶に風邪でもひいて不調気味でいると逢う人すべてが異口同音に「飲み過ぎですか。身体は大切にしてください。」と有難いご忠告をいただく。切ないことだ。

▼酒飲みの看板を一度あげると、それを自分の手でおろすのはかなり至難のことであり、また周囲の人達もそれを容易に認めてはくれない。それが自他共に認め得る時は、瀕死の大病を患つてドクターストップがかけられた時を置いて他にはない。「あの人は大病したお陰で、すっかり酒をやめられて本当によかつたわね。」などとよくご婦人が話しているのを聞くことがある。大方のご婦人にとつては、どうも大病よりも日々酒に飲まれる酔っ払いの方がよほど怖いと見える。「喉元過ぐれば熱さを忘る」の諺がある。

大病と引換に酒をピタリとやめたといわれていた人が、暫らく振りに逢つた先で、以前と寸分違わぬ泥のような姿で酒を呷つているのを見たりすると、いくら私が同類だといえども地獄を見る思いがする。こんな人間は、棺を蓋いで後までも、生前酒を愛した故人への手向けだとはかりに、墓の上からも酒を注がれたりする。何をか言わんや南無阿彌陀仏である。

ここまできると、酒は怖い。されど「盃の中に政治がある」と思えば、そう簡単には愛の契を違えるわけにはいかない。